

小児の口腔機能発達不全症について理解する

田村 文誉

日本歯科大学附属病院 口腔リハビリテーション科

平成30年4月、「口腔機能発達不全症」が新病名として保険収載されました。障害児者を対象とした食べる機能の問題への対応は「摂食機能療法」が行なわれます。一方口腔機能発達不全症が保険収載されるまでは、定型発達児に対しては医療保険での対応ができませんでした。しかし現在では、この「口腔機能発達不全症」の病名で、定型発達児においても管理・指導を行うことができるようになりました。令和2年度の診療報酬改定でその一部が改訂され、対象範囲が哺乳期からの乳児に広がりました。また令和6年度には客観検査として舌圧検査が導入され、管理・指導内容も充実してきました。

口腔機能発達不全症の罹患率について、口腔機能発達不全症の病名の電子化されたレセプト情報から2022年の罹患率を算出した研究では、対象年齢0～17歳未満のうち2.4%との報告があります。口唇閉鎖不全については、2021年に発表された論文で、3歳から12歳までの子どもの約3割にみられることが報告されています。

子どもの食の問題は様々であり、経過を見守っていれば自然に解決する場合もあれば、特別な介入が必要になる場合もあります。子どもの口腔機能発達には、保護者の思いや家庭環境が影響していることも多く、親子関係を含めた保護者への配慮も求められます。口腔機能発達不全症に対しては、歯科医療の中だけで行うのではなく、必要に応じて多職種、他分野との連携を図り、「生活を診る支援」として取り組むことが大切です。

【参考】

- 1.Yamada H, Tamura F, Kikutani T : Number of children with developmental insufficiency of oral function : A study using Japan's national database, January 31, 2025 (in press)
- 2.Nogami Y, Saitoh I, Inada E, et al. : Prevalence of an incompetent lip seal during growth periods throughout Japan : a large-scale, survey-based, cross-sectional study. Environmental Health and Preventive Medicine (2021) 26 : 11 <https://doi.org/10.1186/s12199-021-00933-5>